

フトやワープロ以外は使えなくされてきたそれとは全然違った。

暫くナオヤはリビングに置かれたパソコンに熱中した。ゲームそのものではなくそれを作るコンピュータに興味を持ちはじめていたナオヤにとって、その古いパソコンは自らの好奇心を満たしてくれるまたない道具だった。キーボードを打つ時点で早々に音をあげた伯父はナオヤの様子に随分と感心していて、夕食後早々にパソコンに向かうような彼の熱中ぶりも多めに見てくれた。

「伯父さん、伯母さん、お願いがあるんだけど……」

パソコンを得て三ヶ月もしないうちにナオヤはどうしても我慢出来なくなつた。もつと知識や技術が得たいという衝動は過去世からいつもナオヤを突き動かしていた。その原動力は神への復讐心だったが、もつと遙かな昔……ナオヤがカインだった頃から知識を得て自ら考える事は彼にとつてとても重要だった。だからこそ神の言うままに羊を育てるのではなく、試行錯誤して作物を収穫しようなどと考えたのだ。

インターネットに接続出来るようにしてほしい、というナオヤの望みを叶えるべきか伯父達は迷つたが、おもちやもゲームも自分からは欲しがらずテーマパークへ遊びに行きたいとも言わない子供が初めてねだったものだ

からと言う通りにしてやった。

「夜更かしはダメよ。早寝早起きして朝にしなさいね」
当時は常時接続が無く、夜間帯のみの定額ダイヤルアップが主流だった。それからナオヤは夕夜と同じか少し遅い時間にはベッドに入り、朝早く起きてパソコンに向かうようになった。

「ナオにいちや、おやすみなあい」

「おやすみ夕夜」

週に何度かは従弟はナオヤの部屋で寝るようになっていた。ベッドの中で母親にするように抱っこをせがむ従弟はそれなりに可愛らしかった。けれどナオヤはまだ冷静だった。

（可愛いと感じさせるのはそうして庇護を得る生きものだから当然として、どうしてこんなに俺に懐くんのだ？ やはりアベルの因子か？ いや、ただの刷りこみだるうな。一緒にいた時間が長い……それだけだ）

小さな従弟がいつのまにかナオヤのバジヤマに吸いついている夜は、うっかり鉦を飲みこまないようにナオヤは自分の指を吸わせた。次の夜からは鉦の無いTシャツを着て眠るようにした。そこまでするから余計に従弟に懐かれるのだと気づかないわけではなかったが、この家庭で恙なく過ごす為だとナオヤは従弟を決してぞんざい